

研究紹介 「一条兼良著『伊勢物語愚見抄』の中間本について」

大阪大学大学院博士後期課程修了 藤原美佳

一、はじめに

▼『伊勢物語愚見抄』とは

一条兼良の著書。旧注の祖とされる。『伊勢物語愚見抄』には、大きく分けて長祿四年（一四六〇）成立の初稿本と、文明六年（一四七四）成立の再稿本がある。

〔参考1〕初稿本（田中宗作氏「伊勢物語愚見抄初稿本（翻刻）」（『伊勢物語研究史の研究』桜楓社・一九六五年）より引用）

長祿四年の年冬の末つかた、彼物語をひらきみ侍る次に、愚見の及ところをいさゝかするしいだし侍り。すべて箱の底にかくして、しきみのほかにいだしすべからざる物也。桃の花の坊にすみ侍る翁が筆のすさみに書侍り。

〔参考2〕再稿本（天理大学図書館蔵・甘露寺親長書写本（九一三・三二・イ一〇七）を私に翻刻）

長祿之末年、披覽此物語之次、粗考古抄之誤、聊書今案之説。件本漸流布世間。有伝写之輩歟。爰上都擾乱後、南京閑居之暇、重加校合、非無訾謬。仍更染禿翰、別編愚抄。專以閑麗翁之艶詞為肝要、併以定家卿之勝説為指南。蓋不失昔物語之本意、欲為大和

歌之助縁也。旧為一卷、今分上下。若数奇之輩有書写之志者、以此本可為正而已。

二、刈谷市中央図書館蔵『伊勢物語愚見抄』の位置付け

一、問題の所在と先行研究

【資料1／伊勢物語愚見抄・初稿本の伝本】

A 桃園文庫蔵本（前半欠）、B 斑山文庫旧蔵本（日本大学蔵・田中宗作氏翻刻）、C 鉄心斎文庫蔵本（鉄心斎文庫 伊勢物語古注釈叢刊・第九卷所収、奥書無し）、D 刈谷市中央図書館蔵本…*

▼『国書総目録』

●伊勢物語愚見抄いせものがたり 五巻 ⑧愚見抄
⑧注釈 ①一条兼良 ②長祿四初稿、文明六再稿 ③内閣（文明六・八兼良奥書・文明一二）転法 ④三条公教奥書、五巻一冊・宮書同上、二巻二冊・桃園（長祿四初稿本下巻一冊）（再稿本一冊）・学智院三条西（下巻一冊）・京大（大永 二写二巻一冊）・刈谷初稿本？一冊・島原（文明一二）公教奥書、二冊・北野江戸初期写一冊・天理（文明六奥書、明応三甘露寺親長写）
⑤三條公教奥書、五巻一冊・宮書同上、二巻二冊・桃園（長祿四初稿本下巻一冊）（再稿本一冊）・無窮神習（二巻一冊）・旧浅野（二

【資料2／先行研究】

① 大津有一氏『伊勢物語古註釈の研究 増訂版』（八木書店・一九八六年）
版：宇都宮書店・一九五四年）

（刈谷図書館蔵本の書誌を挙げられたのち*発表者）右に示したやうに、長祿

の奥書を持つてゐるが、果たして純粋な初稿本であるのかどうか。若し桃園文庫蔵本が初稿本の略本だとすれば問題は別だが、さうでなければ、この刈谷図書館蔵本には或は文明再稿本の要素が入込んでゐるのではないかと疑われる。

②片桐洋一氏『鉄心齋文庫 伊勢物語古注釈叢刊』第九卷(八木書店・二〇〇一年) 解題より

『伊勢物語愚見抄』の伝本は多いが、長祿初稿本はきわめて少ない。刈谷市立図書館本のように長祿の奥書を持つていても本文が初稿本でない場合や、東海大学図書館桃園文庫本のように後半だけの零本であったりして、完本として残る純粋な長祿初稿本は田中宗作氏の『伊勢物語研究史の研究』に翻刻された高野辰之氏旧蔵本だけしか知られていない。

③武井和人氏「伊勢物語愚見抄」(二条兼良の書誌的研究 増訂版)おうふう・二〇〇〇年(初版・桜楓社・一九八七年)

・全冊にわたつて朱引が施される他、本文と同筆で細注が書き入れ
てある。

・確かに、(刈谷本は*発表者 全体として見れば再稿本に近いことは疑
ひないが、しかし、初稿本の面影を色濃く残してゐるし、また3例
の△(初稿本と再稿本と注の条目を比較された用例数*発表者)が物語る如く、
いづれにも属さない注もあり、二元論では律しえないこと、これ
また明白であらう。あるいは、初稿本↓刈谷本↓再稿本といふ図
式が実態に最も近いのかもしれないけれども、(中略)兼良の諸著作
の変貌は、かかる見取り図を許容するほど単純でもあるまいと思

われる。

・刈谷本は初稿本と再稿本の中間(どちらかといふと再稿本より)に位置す
る。

【資料3】刈谷市中央図書館蔵『伊勢物語愚見抄』の書誌】

所蔵番号 B三〇〇冊数 一帖/装丁 袋綴/寸法 縦二六・八糎、
横一九・八糎/表紙 草花紋(紙表紙)/見返し 本文共紙/本文料
紙 楮紙/外題 愚見抄(左・題箋草花紋)/内題 伊勢物語愚見抄
/墨付丁数 一一七丁・前付遊紙二丁・後付遊紙二丁/本文 一面
十一行(二丁ウラ)

*序・奥書ともに初稿本と一致

*『伊勢物語』本文を全文引用

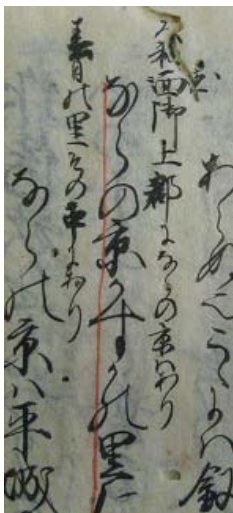
*注釈部分に三十箇所に及ぶ細字書入(武井氏の述べる所の細注)
有り

*本文同筆の識語有り

此本一条禅閣兼良御筆写物也

一校了

〈参考3〉刈谷本・第一段「ならの京かすかの里」に付された細字



二、刈谷本の細字書入① —再稿本増補部分と一致する細字書入—

【資料4／第一段】

〔初稿本〕

ならの京は平城の宮也。しるよしとは知行の所あるを云。

(後略)

〔刈谷本〕(細字書入はゴシックにし、へへへまとめた。以下同様。)

ならの京かすかの里にしるよしとてかりにいにけり

〈大和国御(ママ)上郡にならの京はあり。春日の里その中にあり。〉

ならの京は平城の宮也。しるよしとは知行の所あるをいふ。

(後略)

〔再稿本〕

ならの京は平城の宮也。大和国添上郡にならの京はあり。

春日の里は其中にあり。しるよしとは知行の所あるをいふ。

(後略)

【資料5／第百一段】

〔初稿本〕

しなひとは、なわなどをとりつづけたるやうにながきを云也。

〔刈谷本〕

かめに花をさせりその花のなかにあやしき藤の花ありけり

花のしなひ三尺六寸はかりなんありける

〈催馬楽にはあを柳かしなひをみれはとあり〉

しなひとはなはなとをよりつづけたるやうになかき心をいふ也。

〔再稿本〕

しなひとは、なはなとをよりつづけたるやうに花のふさのなかきをいふ也。催馬楽には青柳かしなひをみれはとあり。

三、刈谷本の細字書入② —細注という位置付けへの疑問—

【資料6／第八十四段】

〔初稿本〕

身はいやしなから母なん宮なりける

a 業平の母は伊豆内親王桓武の皇女也。貞観元年九月薨。

さるにしはす許にとみの事とて御ふみあり

〔刈谷本〕

昔男ありけりみこ(ママ)いやしなからはなん宮なりけるそのはなかをかといふ所にすみたまひけり子は京に宮つかへしければまうつとしけれとしはくえまうてすひとつここにさへありければいとかなしうしたまうけり

a 業平の母伊登内親王は桓武の皇女也。貞観元年九月薨す。

b へあにの行平守平弟の仲平なとも同腹にむまれたれと、中にもいとをしく思所一ことはいへる也。く。

〔再稿本〕

身はいやしなからはなん宮なりける

a 業平の母伊豆内親王は桓武の皇女也故に宮といへり貞観元年九月薨す。

ひとつここにさへありければいとかなしうし給ふけり

b 中将のあに行平守平弟の仲平なとも同胞(ママ)にてあれども、とりわけ中将をいとをしく母の思ひ給へるによりてひとつことはいへり。一子の思ひをなせる心也。

▼武井和人氏「伊勢物語愚見抄」(2、③)

◇第八四段「ひとつここにさへありければ、いとかなしうし給ひけり」

(中略)

この場合の転位は、次のやうに整理出来る。

初稿本「X」↓刈谷本「A・母伊登内親王の閨歴+B・史実と物語との齟齬の回避↑物語からの読み」↓再稿本「Aヲ省略、Bヲ増補」

本来Bは、刈谷本が細注としてあることから想像出来るやうに、“従”であり、“主”はAの方にあつたらしい。しかし、再稿本執筆の途上で、まさに主客が転倒し、再稿本のスタイルに落ち着いたのだらう。兼良の学問が増補のみを以って成長してゆくのではない好例といへよう。

四、刈谷本の位置付け

▽刈谷本に見られる細字の書入には、兼良の思考過程の痕跡が留められており、その姿を今に伝える点において、刈谷本は貴重な伝本であると位置付けることができる。

三、武井和人氏蔵一条兼良自筆『伊勢物語愚見抄』の位置付け

一、新出の書誌と問題の所在

▼『思文閣古書資料目録(善本特集・第二輯)』(二一四号・二〇〇九年)

本書は、奥書の示す通り、初稿本系統に属するものである。ただし、再稿本の特徴を示す注もみられることから、刈谷図書館蔵本同様、初稿本から再稿本に至る過渡的な本文を存するものと思われる。

【資料10 / 武井本の書誌情報】

所蔵者 武井和人氏 / 冊数 一冊 / 装丁 袋綴装 / 寸法 縦二六糎、横二〇・九糎 / 表紙 濃緑地に牡丹唐草模様 / 見返し 本文共紙 / 本文料紙 楮紙 / 外題 伊勢物語愚見抄(中央題箋・白無地) / 内題 伊勢物語愚見抄 / 墨付丁数 九十六丁、前後に遊紙一丁有 / 本文・一面十行(一丁オ)

跋文

長祿四年冬の末つかたかの物語をひらきみ侍るつひでに愚見のおよぶところをいさゝかするしいだし侍り。すべて箱の底にかくしてしきみのほかにいだしすべからざる物也。桃の花の坊にすみ侍るおきなが筆のすさみにかき侍り。

* 筆跡から一条兼良自筆と判断できる

* 序・奥書ともに初稿本と一致

二、武井本の位置付け・その1 ―刈谷本との先後関係―

1、初稿本・武井本・刈谷本が一致する注

【資料11／一〇段】

〔初稿本〕

あてなる人に心つてたり

あてとは当の字也。我程の種姓なる人をあてなるといへり。又みめかたちあしからぬ心にもかなひ侍り。

〔武井本〕

あてなる人に心つてたり

あては当の字也。我程の種姓なる人をあてなるといへり。又みめかたちあしからぬ心にもかなひ侍り。

〔刈谷本〕 *刈谷本の「く」は削除を示す記号。以下同様

昔男むさしの国までまよひありきけり。さてそのくにゝある女をよばひけり。父はこと人になんあはせんといひけるを母なんあてなる人に心つてたり

あては当の字也。われほどの種姓なる人をあてなるといへり。

く又みめかたちあしからぬ心にもかなひ侍り。

〔再稿本〕

はゝなんあてなる人に心つてたりける

あては当の字也。われほどの種姓なる人をあてなるといへり。

2、初稿本・武井本と刈谷本・再稿本で分かれる注

【資料12／一段】

〔初稿本〕

昔おとこうみかうぶりして

(前略) うゐは初也。かうぶりは爵也。五位のかうぶりといふは叙爵をいへば業平中将初て叙爵したる事をいへり。彼叙爵は仁明天皇御宇嘉祥二年正月七日とみえたり。一には元服をうゐかうぶりといへり。後撰などの詞にもうゐかうぶりといへり。両説ともに無相違者也。

〔武井本〕

むかしおとこうみかうぶりして

(前略) うゐは初也。かうぶりは爵也。五位のかうぶりといふは叙爵をいへば業平中将はじめて叙爵したる事をいへり。彼叙爵は仁明天皇の御宇嘉祥二年正月七日とみえたり。一には元服の事をうゐかうぶりすといへり。後撰集などの詞にも首服をかうぶりすといへり。両説ともに相違なきことなり。

〔刈谷本〕

むかしおとこうみかうぶりして

(前略) うゐは初也。かうぶりは爵也。五位のかうむりといふは叙爵をいへば業平中将初て叙爵したる事をいへり。かの叙爵は仁明天皇御宇嘉祥三年正月七日と見えたり。一には元服の事をかうぶりすといへり。後撰集などの詞いはざるにあらぬ也。こゝには叙爵をうゐかうぶりとはいふべし。へ日本記にも初位とかき出てうゐかうふりとよめるなりく

〔再稿本〕

むかしおとこうみかうぶりして

(前略) うみは初也。かうぶりは爵也。五位のかうぶりといふは叙爵をいへば業平中将はじめて叙爵したることをいへり。かの叙爵は仁明天皇の御宇嘉祥三年正月七日と見えたり。一には元服の事をもかうぶりすといへり。後撰集などの詞にもいはざるにはあらねどもこゝには叙爵をうみかうぶりとはいふべし。日本紀にも初位とかきてうみかうぶりとよめる也。

三、武井本の位置付け・その2 — 初稿本の延長にある中間本 —

1、初稿本・武井本・刈谷本に共通する跋文

【資料13／跋文】

〔武井本〕

長祿四の年冬の末つかたかの物語をひらきみ侍るつひでに愚見のおよぶところをいさゝかするしだい侍り。すべて箱の底にかくしてしきみのほかにいだすべからざる物也。桃の花の坊にすみ侍るおきなが筆のすさみにかき侍り。

*初稿本・武井本・刈谷本ともに共通する

2、初稿本・武井本・刈谷本で共通する抄出本文

【資料14／七段】

〔初稿本〕

京にありわびてあづまにいきけ(るに)

(略)

海づら

海のほとりなり。

〔武井本〕

京にありわびてあづまにいきけるに

(略)

海づら

海のほとり也

〔刈谷本〕

昔男ありけり。京にありわびてあづまに行けるにいせをはりの

あはひの

(略)

海づらをゆくになみのいとしろくたつをみて

海のほとりなり

〔再稿本〕

京にありわびてあづまにいきけるに

(略)

伊勢おはりのあはひの海づらをゆくに

海づらは海のほとり也

3、再稿本の奥書から

【資料15／再稿本奥書】

長祿之末年、披覽此物語之次、粗考古抄之誤、聊書今案之説〔*初稿本・中間本〕。件本漸流布世間。有伝写之輩歟。爰上都擾乱

後、南京閑居之暇、重加校合、非無訾謬。仍更染禿翰、別編愚抄〔*再稿本〕。專以閑麗翁之艷詞為肝要、併以定家卿之勝説為指南。蓋不失昔物語之本意、欲為大和歌之助縁也。旧為一卷、今分上下。若数奇之輩有書写之志者、以此本可為正而已。

四、武井本の位置付け・その3 ―刈谷本に直接結びつかない武井本―

【資料16／一二段】

〔初稿本〕

国のかみからめられけり

国のかみは武蔵守也。盗人とあればからめらるゝといへり。

〔武井本〕

国のかみからめられけり

へとりかこめられたるを

国のかみは武蔵守也。盗人とあればからめらるゝといへり。それまでの事はあるまじ。たはぶれにもおとしてすべきわざ也。

〔刈谷本〕

国のかみからめられにけり。女をは草むらの中にをきてにげにけり。

国のかみは武蔵守也。ぬす人なれば、からめらるゝといへり。是までの事はあるまじ。たはぶれにもおとしてすべきわざ也。

〔再稿本〕

国のかみからめられにけり

国のかみは武蔵守也。ぬす人なれば、からめらるゝといへり。それまでの事はあるまじ。たはぶれにもおとしてすべきわざ也。

なり。

▽武井本は初稿本から再稿本へと至る中間本ではあるが、初稿本↓刈谷本↓再稿本という直線上には並ばない本である。兼良の注釈作業が単純な増補ばかりではないことを確認できるとともに、兼良の自筆によって兼良の注釈作業の実態が示されている点において、武井本の価値は非常に高い。

四、今後の課題

- ・『伊勢物語愚見抄』校異集成の作成
- ・伝藤原藤房筆『伊勢物語』の位置付け
- ・一条兼良周辺の『伊勢物語』―近衛政家筆『伊勢物語』等
- ・架蔵本『伊勢物語』の紹介